

祖廟に教化研究の推進を誓う

丸山 邦雄

「七百遠忌報恩の誠を祖廟に捧げ、報恩のための教化活動に取組む誓願を新たにし、十年を積み重ねた教化研究の実績を踏えて、さらに拡大強化と活動の組織的推進をめざそう」と、第十二回中央教化研究会議は、十月二日、三日の二日間、祖山身延に三百人をこえる僧侶が集い、七百遠忌報恩教師結集大会として行なわれた。

十月二日、正午までに西谷の各宿坊へ参集した三百二十人の参加者は、黒の居士衣に木蘭色の五条袈裟を着け、各宿坊の前から整列して、祖師堂棧神閣へ向かった。布教研修所の研修生たちがうち鳴らすうちわ太鼓に合わせて、唱題行進で、西谷の参道を登っていく。その長い行列は、先頭が身延山法喜堂の大玄関前に到着しても、末尾はまだ西谷の参道を登りきったところにあった。日本を代表する建築家の谷口吉郎氏が「広

場を前に、直線に並んだ建物群は他に例を見ない美しさである」とほめたたえた諸堂の前に、長々と長蛇の列がつづき、そのようなすは厳肅であり、荘観であった。

参加者は書院から、仏殿、納牌堂、ご真骨堂を通り、棧神閣へ入堂。経机などすべての仏具がとりはらわれた広い内陣は、参列の僧の黒衣一色に埋めつくされた。

報恩法要は午後一時から、竹下日康身延山総務の導師（副導師は岩間湛良身延山布教部長と秋山智孝身延山庶務部長）のもと、進められた。三百余人が力強く読誦する法華経と、至心に唱えるお題目の声は、高い天井にこだましてすぎまじいばかりの迫力を生み出し、感激と法悦のるつぼと化した。

興奮さめやらぬなか、松村寿顕宗務総長が立ち、あかさつ。「七百遠忌を明後年にひかえ、全国的に報恩法要や記念事業が盛大に進められています。内局一同

も全宗の期待にそうよう、東に西に飛びまわっています。こうしたときに、布教にあたって起ってくるいろいろな問題を協議していただき、研究していただくことは、大きな意義があります。ことに今回は日蓮聖人のおん魂の棲む身延山で実施することができ、この上ない感激であります」と述べた。さらに竹下総務と地元松岡堯雄山静宗務区長（山梨県第三部宗務所長）があいさつした。

午後二時半からは、会場を身延山大学講堂に移し、全体会議を行なった。正面には「第十二回日蓮宗中央教化研究会七百遠忌報恩身延山教師大会」の横幕と、「合掌で光を、知恩報恩七百遠忌」「七百遠忌と伝道教団づくりをめざして」のスローガンが、左右に掲げられていた。

まず近江幸正師（日蓮宗現代宗教研究所顧問）が「現代の危機とそれに立ち向う伝道教団づくり」のテーマで基調講演を行なった。師はこれの中で①報恩の実践は伝道教団の実動体制をつくることである。②立正安国の祖願を現代に活かそう。③現代の危機状況を見つめよ。④立正平和の課題にとりくもう。⑤寺檀関係の体質改善と教師の自覚的な信行学の教化実践。⑥法器養成と人材教育にとりくもうなど、今回の会議の六つ

の分科会テーマをもふまえて、問題点を提起した。

日程説明など行なわれたあと、参加者は再び行列して西谷の各宿坊へ帰り、着換えをすませて次の日程に移った。

午後四時からは、六つの分科会に分かれて具体的な討議に入った。この頃から、身延山は雨雲につつまれ、秋の冷たい雨が落ちはじめた。

第一分科会（武井坊）は、「寺檀問題と教化活動」のテーマで行なわれた。

まず問題提供者の北川即正師（滋賀）が、「寺檀関係の見直しを」のテーマで、①寺のあり方と檀信徒への姿勢、②仏事行事と教化など、寺檀関係の現状と問題点を指摘した。師は、先祖供養が優先している現状や、檀信徒に対して仏事行事を通して仏縁を結んでいる実例などから、今後への方向づけを提示した。

ついで木名瀬寛明師（秋田）が、「寺檀関係を再組織せよ」のテーマで、また小倉光雄師（長野）が、「寺檀関係と教化活動についての課題」のテーマで、それぞれ寺院を地域にいかに関放していくか、未信徒を信じさせるためにどう活用していくか、そのためにどうあるべきかなど、問題点を指摘した。

ここでは、助言者太田鳳苑師（愛知尾張）井田湛孝

師（静岡西部）などをまじえて、教線拡張の場としての寺院が対外的活動とどう関連づけていくか、檀信徒教化でこうして実をあげているなど、体験や実践活動をふまえて、活発な意見交換が行なわれた。

第二分科会（北之坊）は「子弟教育と法器養成」のテーマで行なわれた。

発題者の岩堀豊種師（岐阜）が「寺院子弟の現状と後継者問題」のテーマで世襲化が定着し、師弟継承の伝統が失なわれ、有能な人材が宗門外へ流出するなどの現状と問題点を指摘し、その対策として、①後継者養成の方策を確立すること。②世襲制への反省、③伝道宗団の再生としての住職の再教育、④後継者のない寺院の救済などを提示した。

また発題者の新聞智照師（兵庫東部）は「宗門の法器育成を考える（総合一貫カリキュラムを）」と、宗門教育の歴史から説きおこし、いまや総合一貫カリキュラム教育期に入ったとして、教育に当る人材の重要性を指摘した。

この二人の発題をもとに、助言者の刀称義昭師（福岡）と篠塚日流師（福島）をまじえて、①世襲が一般的という子弟教育の現状と問題点、②寺の職業化と教化活動の問題点、③後継者養成の方策の確立とその問

題点、④住職の再研修、⑤法器養成とカリキュラムなどの諸問題が討議された。

第三分科会（林蔵坊）は、「現代の家族関係と幼児、青少年教化」のテーマで行なわれた。

発題者の石井鍊昭師（神奈川二部）は「寺院活動にとって青少年教化はどう考えるべきか」として、地域社会の指導者となって、仏教者の心で団体内で活動することや、地域全体の家庭と結ばれ、親子の相談相手となることなど、寺院外活動と、寺を常時、修行の場と布教仏道の道場にすることが大切という寺院内活動などについて指摘した。

また発題者の中村潤一師（福岡）は「青少年教化と日蓮宗との接点」として、環境浄化と教化の問題など体験をふまえて青少年教化の重要性を提示した。

さらに助言者の三田村竜全師（神奈川二部）が家族制度と先祖崇拜を基盤とした特色を指摘し、仏縁をいかに血縁に浸透させていくかを述べたほか、助言者の梶山寛潮師（山梨四部）もまじえ、青少年教化と信徒青年教化の必要性や家族制度の変化とその教化上の問題点などが話しあわれた。

第四分科会（樋沢坊）は、「日蓮聖人の報恩精神と七百遠忌」のテーマで行なわれた。

発題者の木村勝行師（岩手）が「日蓮聖人の報恩精神と七百遠忌」として、日蓮聖人の慈悲にふれる機会を提供する伝道の道場としての寺院づくりをすすめるため、檀信徒一般に寺院を開放することなどを述べたほか、渡辺清明師（現宗研）が発題した。ここでは助言者の井藤太然師（岡山）と奥村隆祥師（静岡東部）をまじえ、教化のゆきづまりや檀権との問題など、実例をふまえて意見が交換された。

また星光諭遠忌事務局事業課長から日蓮宗としての報恩事業について、特派布教や大会の開催、聖人展、記念出版などの計画を聞いた。そのうえで日蓮聖人の報恩精神を七百遠忌奉行にどう生かすか、宗門レベル、寺院でのあり方などについて、体験をもとに、その方法論について話しあった。

第五分科会（清水房）は、「日蓮宗の現状と教化活動の組織化」のテーマで行なわれた。

発題者の中野文海師（静岡東部）が「本宗の現状を凝視して」と題し、昭和五十一年宗勢調査報告書から①人口の移動集中による拠点のない地域に、直接寺院を建てる方法、②四海帰妙の祖願に対して宗祖から七百年を経た今日、一億を越えた人口のわずか二、五パーセントにしかならない檀信徒数の事実をよく考えなけ

ればならない——ことなどを指摘し、僧風教育の充実と教化を提示した。また江本篤史師（愛知尾張）は、教化センターや教化研究会議の重要性を指摘したほか、風間随宏師が発題した。

ここでは助言者の平岡日静師（静岡西部）功刀貞如師（山梨三部）、伊藤如顕師（三重）をまじえ、とくに教化センター設立とその運営をめぐる諸問題について活発な討議が行なわれた。また二日目には、グループ別の討論の時間も設け、小グループに分かれてお互いの意見を十分に出しあって、それをまとめてさらに全体で意見を述べあうという形で進められた。

第六分科会（本行坊）は、「現代社会の諸問題と教化」のテーマで行なわれた。

発題者の吉本前教師（山口）は労使の対立する労働問題、教師と生徒をめぐる教育問題、家庭の諸問題など、現代社会の問題となっている種々相をあげ、その原因は国民的指導原理がないと指摘し、救いのため方策として、日蓮聖人の宗教を大衆に知らしめることにすると提案した。石田良正師（京都一部）は、本化門下の独自性をもとと、立正平和の問題を提示したほか、井本学雄師（兵庫県西部）が発題した。

ここでは現代の複雑な問題ととりくむためには、も

つと僧侶自身が日蓮聖人のご遺文に直参し、他の分野の知識の学習に励み、社会をリードすべきだ——など、自らの姿勢について活発な発言があった。

分科会は二日目も午前九時半から正午までつづけられた。

また一日目の夜には、七時から雨の中、各宿坊を隊列して出発し、西谷の祖廟へ参拝し、風間教務部長を導師に法華経を讀誦し、唱題行を行ない、法味を祖廟にささげた。

二日目の正午に分科会を終えたあと、閉会式が祖廟で行なわれ、新間智照師が参加者を代表して大会宣言文を朗読し、これを採択して、すべての日程を終了した。